
ナミダカフェ-下

沙夜菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナミダカフエ - 下

【Zコード】

N9473V

【作者名】

沙夜菜

【あらすじ】

上の続きです。

唐突に始まつてるので、下から読み始めるというのは難しいかと。違うタイトルで、他サイトにもあります。

(前書き)

上の続きです。

それからページをめくつていいくと、やがて自己紹介が書かれたところへ辿りついた。

「朝香ヒナキ」。特技の欄には控えめで優しい、彼女らしい字で「料理」とある。将来の夢は「自分の店を持つこと」。

「うう、夢叶ってるじやん。

俺は。

将来の夢はイラストレーター……なんて、そんな夢。高3の時、呆気なく崩れたのに。

小学校の卒業アルバムで、クラスのページの差し絵を描いて、と言われた。その時は普通に嬉しかったし、快く受け入れたのだが。「……浮かれちゃつたんだろうな」

多分、たつた30人程度の中で選ばれただけなのに、他のクラスの1番と比べてもそう目立つて上手いということもなかつたのに、ただ「俺は1番になつた」。クラスの中で「という部分にはそつと伏せ字をして。

「それに比べると、朝香つて本当にすごいんだな」

いつか、たまたま指が当たつたことがある。プリントの受け渡しの時に少し触れただけだが、その指は乾燥していても温かな、母さんと同じ手をしていた。きっと、何回も料理失敗したりして、その度に作り直して、あのコーヒーも、パイも、何回でも、納得できるまで。その努力が、そのまま手に表れたのだと思う。

俺とは違うものを持つて朝香が、今とてつもなく大きな存在に思えた。

次の日は、いつもより遅めに行つた。閉店間際の5時45分。

「今日はもう来ないのかと思いました」

少しだけ寂しげに彼女が微笑む。俺も曖昧に笑い返して、カウンタ一席に座つた。

何も言わなくても、彼女はそつといつもの「コーヒー」を出してくれる。お互いに言葉を交わさないまま時間が過ぎて、やがて朝香が聞いてきた。

「光野君、絵得意でしたよね？」

「え、いや、全然。全然！」

あわてて否定して、目のやり場に困り「コーヒー」を飲み込む。「でもよく賞とかもらってたじやないですか。私絵下手だからす」いなあって」

朝香が続ける。そう言わると嬉しいところのは否定できないが、なぜ突然絵の話なんか

「それあの、この店の看板、描いてもらえたならなあ……とか」

「……へ？」

なんとか噴き出すのは堪えたものの、唖然として聞き返した。店の看板つて、そんなの、え、嘘だろ？

「期待になんか全然沿えないと思うんだけど」

そんな責任あること、俺には無理だ。視野が狭くて、自己満足だけして、その先に進もうともしないくせに、イラストレーターになりたいなんて夢だけ偉そうに語つてカツカツつけてた俺には。「無理だつて……」

少しだけ景色が滲んできて、朝香にばれないように袖で拭つ。

「朝香さん、6時ですけど」

その時、奥から女人が顔を出した。

「それなら、外の看板ひつくりかえしとして。あと中から鍵かけて。片付けはしどくから、先に帰つてていいよ」

女人は手際良く、といつても簡単なことだが、それを済ませて会釈だけすると、裏口から帰つて行つた。

俺は何も言つていないので、朝香は新しい「コーヒー」淹れますね、とお湯を沸かし始める。まだあるけど、と声をかけると、冷めてるじゃないですかと笑つた。

「……絵、ダメですか」

スプーンを動かしながら、残念そうに朝香がつぶやく。俺はうつむいた顔をあげることができなかつた。出来ることなら、俺だつて描きたい。描きたいけど、その自信がない。 だつて、何年も描いてないし、まだちゃんと描けるか分かんないし。

下手で、朝香に失望されたくないというのが理由の7割くらい。店内は静かで、お湯の沸ける音がやけに大きく響いていた。

「やつてみなきや、分かりませんよ」

ふいに朝香が言う。

「あのコーヒーもパイも、このお店を出すことも、最初は自信の欠片もなかつた。みんなには料理上手いんだねとか言つてもらえてたけど、それでも家族とちょっとしきいなかつた友達からつてだけだし」

何も返せない俺に、朝香は続けた。

「自己満足した時期もありましたけど、いつだつたかな、シュークリームかなんか作ろうとして、5回くらいずつと失敗したんです。それで、今まで誉めてもらえてたのも全部お世辞な気がしてきました」

俺もそうだつた。小6で成長が止まつて、中学の時にはそこから目を逸らして、高3でやつと現実を見た。美術の授業で先生がランクをつけた時に、いつもAをもらつていたのがBに下がつて、それから一度もAがとれなくなつて、成績まで「5」から「3」に下がつた。Aをもらつた奴の作品を見てみると明らかに俺のより上手かつたし、そこでやつと、井の中から俺は顔を出したのだ。イラストレーターになりたいとか言つてた自分がどうしようもない馬鹿に思えてきて、上手と言つてくれた笑顔が全部作り物に見えてきてしまつていた。

「でも、家庭科の調理実習で光野君が上手いねつて言つてくれて。違う班だつたんだけど、隣の机から顔出してくれたんです。なぜか、それはお世辞に聞こえなかつた。……私が勝手に思つただけなので多分違うんですけどね。 ちょっと夢見てました」

俺は首を振った。そんなことは覚えてないけど、適当にお世辞を言つタイプではないし、中学の時もそつだつた……はず。

「そのおかげで何とか自信持てました。もうちょっと頑張ってみようって思つてそれで、今度は私が光野君に自信あげられたらなあって。光野君の夢とか知らなかつたから何も出来なかつたんだけど、いつか絶対、お返ししようと思って」

ずっと喋りとおして、朝香はフツと息をついた。

「すいません、なんか」

困つたように笑つて言つた。

「…………朝香、あのせ」

やつと俺は顔をあげて、切り出した。いきなりすざわぬもしたが、今言わないと一度と言えないと。

「朝香のこと、多分好きだ」

ちゃんと言えなくて、思わず「多分」をつけたことに焦つた。

「いや、多分じゃなくて……好きだ」

しどろもどろに言い直して、そつと朝香を窺つ。朝香はしばらく黙つていたが、やがて「すみません」と小さくつぶやいた。びきりとした俺の胸をよそに、小さく笑う。

「ゴーヒー、忘れてた」

放置されていたカップに急いでお湯を注ぎ、砂糖を入れてかき混ぜる。

朝香の頬を一筋の涙が滑つて行つた。手元は見えていなかつたが、おそらくそれはカップに落ちて行つたと思う。朝香は気付いたか分からぬが、そのままそれを俺の前に置いた。

俺はとりあえず口をつけて、首を傾げた。味、戻つた。

「なんか変な味しますか」

不安げに言いつつ、朝香自身もカップを傾ける。

「いや、あの、美味しくなつたなあつて。ずっと、2年間この味だつたんだけど、えつと、その」

言つていいものかと口をつぐんだが、朝香が目で促してきたので続

けた。

「一昨日から、コーヒーの味が落ちた気がして。いや、その十分美味しいけど、でも前と比べると」

途中からやつぱり言つべきじゃなかつた、と後悔した。朝香の顔が目に見えて蒼くなつていつたからだ。

「……違いは、淹れる時私が泣いたかどうかです」

困つたような表情のまま、朝香は続ける。

「私高校でも大学でも、ずっと光野君のこと忘れられなくて。すごく執念深い人みたいだけど、それでも。だから大学出て、光野君が東京行くつて中学の時言つてたから、それにすがりついてのこのこと東京まで出て来てみたんです」

恥ずかしげに彼女は笑つた。でも、どうして此処と分かつたのだろう。一番小さい県とはいえど、この広い東京の中で、なんで「此処、イラストの学校近いじゃないですか。……勘です、それは。ちょうど泳えてたみたいでよかつた」

思わず俺は朝香の顔を見つめてしまつた。朝香の言つ事が図星だつたからだ。

来てからこの学校の存在を知つて、住むのやめようかなと思いつつも家買つちやつたから仕方なくここに住むことにした というのは言いわけに過ぎず。本当は美術の学校があることは知つていたし、中学の時はここ行きたいなあとかもカッコつけて言つてみたりしていた。……どうして此処に来てしまつたのかは、未だ分かつていない けど、これも自分についている嘘。画材道具を持つて歩く学生とすれ違うとき、必ず二度見してしまつ。東京に来てから、ずっと。この場所を選んで住み着いたのも、学生を思わず見てしまうのも、まだ未練が残つているからだと思つ。

「だからこのお店も光野君を追つかけてきた結果で、中学の時の夢叶つたのも光野君のおかげつて言つても間違つてないし、だからはじめて光野君が来てくれた時も嬉しくて泣いちゃつて、次からは気付いてくれないことに悲しくなつちゃつて、でもこの間分かつてく

れたから笑えるようになりました。 そのせいで「コーヒーの味が

落ちたつていうのは迂闊というかなんというか、まあ予想外だつたんですけど

そして、にっこりと朝香は笑う。

「今好きって言つてもらえて、また嬉しくて泣いちゃつた。自分からはちやんと言えてないけど、光野君から言つてもらえる方がなんか嬉しいし」

「……波留でいいよ」

俺が言つと、朝香は一瞬口をつぐんだようだつたがそつと言つた。

「波留？」

どうして疑問形なのかとこいつに何も言わないことにして、俺は言つてみる事にした。

「あのセヒナキ、」

弾かれたように彼女は俺を見る。え、ダメだつたのかな、と焦つたが、なんでもないと朝香は首を振つた。

「やっぱ看板、描かせて」

ちゃんと出来るか分からないけど、どんなことになるかなんて想像もできないけど。

「やつてみなきや分かんないつて、言つたよな」

ヒナキが差しだしてくれた最後の光に、すがりついて、成功できるまでやつてみようと思った。ヒナキと同じ手になるまで、何度も。

「お願ひします」

ヒナキは笑つて、頭を下げた。

「あとひ、」

俺が続けると、少しだけ頭を上げる。

「泣かなくてもできる美味しいコーヒーの作り方、探そくな
はい、とヒナキは笑つて耳を引っ張つた。

「入つてたのは波留のだけなんだけど……波留が飲んでたそれを、
他の人にもあげないとね」

ヒナキの言葉につなぎ、 その拍子に涙がするりと滑り落ちた。

昨日アルバムを出した時に一緒に出てきた、捨てるつもりだった画材道具。帰つたら、それに積もつた埃と諦めた時に出た涙を払つておこう。これから自分の自分に、そんなものはいらない。

挫折した高三の自分に、大丈夫だと言つた。

夢見てた中3の自分には、遅れたけど頑張ると言つ。

なぜか流れ落ちた俺の涙はそのままカップへ落ち、朝香の涙と混ざつて、新しい味が生まれたようだった。

(後書き)

ちょっと最近下手かもーとか言つのは私からの言いわけです。
久しぶりに出てきてこれつてなんか申し訳ないです^ ^;
アドバイス・感想等々お待ちしております。
では、最後まで読んでくださった方、ありがとうございました*

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9473v/>

ナミダカフェ-下

2011年8月20日03時30分発行